

栗色の髪散る庭で

かえで

翌日の予定とは関係なしに毎夜セットする……けれど、いつも無意識のうちに止めているアラームの電子音なしに自然と目が覚めた。視界を遮る煩わしい前髪を掻きあげて、もう数ヶ月髪を切っていないことを訝えきらない頭でぼんやりと思い出した。こんなことを思い出してしまうのは、暖冬だと言われていた一月が過ぎ、二月に入ってから雪吹雪く寒さのせいかもしれない。要は人恋しいのだ。

大学生になってからの春休みは、僕が思っていた以上に暇だった。なにかをやらなくてはと思ってみても、なにをすればいいのか分からないのだ。高校生までの僕は、与えられた課題だけをこなして満足していたのだから、それも当然なのかもしれない。どうやら僕は、地図を持っていないみたいなのだ。

けれど、この永遠とも思えるような春休み、なにもしないわけにもいかない。すでに二週間の無駄を生産してしまったけれど、残された時間はその倍以上にあるのだ。

実物のカーテンを引き開け、まだ陽の昇りきらない空を見て、実家までの道のりをぼんやりと計算した。きっと、昼前には着くだろう。

そうと決まったら、実家へ在宅の確認すらせずに僕は寝癖を簡単に直し、部屋着のジャージから外出用の服に着替えた。それから手頃なサイズのトートバッグに財布と携帯、音楽プレイヤーだけを入れて、気が変わらないうちに狭苦しいアパートを出ていた。どうにも僕にはあまり綿密に計画を立てると、それだけで満足してしまう節があるようなのだ。

二十数年の間に浴びた酸性雨はどれくらいだろうかと思わせる錆と剥げかかったペンキがささくれ立つ鉄製の外階段を降りる途中、だらしなく下がった前髪をまた見つけた。

そうだ、もし姉さんがいたら、ひさしぶりに髪を切ってもらおう。

なんだかその発想が髪を切るために実家まで行くようで、そんな自分がおかしくて一人でやけてしまう。けれど外に出ていることに気づいてすぐに表情を引きしめる。必要以上に引きしまったのは、外気の冷たさに触れたせいだ。

マフラー嫌いの僕はコートの襟を立てて、忍び寄る冷えきった外気を遮断する。空にはまだ太陽の権力が及んでいないけれど、雲は見当たらず風もない。今日は何日かぶりの快晴かもしれない。雪は好きだけれど、寒いのは嫌いだ。

十五分ぐらい歩いて、最寄り駅まで着く。行き先までの運賃も確認せずに、改札に携帯をかざして入場する。つくづく世の中は便利になったと思うと同時に、それだけ僕の頭は単純に加工されているのだろうと感じる。べつにそれについて悲観的な感想は持たないし、入場料だけをとりあえず払うような昔にだって懐古しない。

よく考えてみれば僕は二週間外に出ていなかった。それなのに急に電車に乗って遠出するという発想に、寝起きの僕の頭の中ではシナプスが混信していたのだと思う。でもきっとシナプスは混信なんてしていないし、そもそも僕はその分野について明るくもない。つまり適当に高校時代に学んだ単語を使って自分を擁護してみただけだ。

誰から擁護するわけでもない言い訳を組み立てていると、電車が来る旨を伝えるひび割れた音声ホームにこだまする。利用者はまばらでも、ラッシュ時と同じ仕事をするスピーカーに僕はほんの少し感心した。

到着した電車に示された行き先をちらりと見て、自動で開いたドアに体を通した。車内は当然のように暖かく、外気にさらされ硬直した僕の体を弛緩させた。そんな空調が完備された空間で

はあるが乗客はほとんどおらず、どこに座るかほんのすこし迷わせるのには十分なほど空席が目立っていた。

しかしいくら空いているからと言ってシートの真ん中を選ぶ気はまったく起きず、ドアから一番近い端の席に座った。プラスチックの仕切りに寄りかかるようにしていると、電車の振動と室温によって、自宅に置いてきたはずの眠気を取り戻してしまう。乗り換えがなければこのまま寝てしまいたいが、あいにくこの電車一本では地元駅まで連れて行くことはない。仕方なしにバッグから音楽プレイヤーを取り出して、これなら本を持ってくればよかったなと思った。部屋で山積みになっている未読の本を思い出して苦笑した。

首にかけた赤いヘッドフォンはデザイン重視で選んだもので、ハウジングが四角い。だからどうだということもないが、このヘッドフォンが一時期とあるコマーシャル内で使われ、その珍しいデザインから有名になった。そんなことが原因で、気にする必要もないというのに僕はしばらくこの赤く特徴的な、コードがなければただの耳あてにさえ見えるこれを外で使っていなかった。しかしどうして今日はこれを使っているのかといえば、とくに理由はない。ただなんとなく、しばらく外に出ていなかったことが僕の中で仲間意識を駆り立てたのかもしれない。

メロディに乗せて押し寄せてくる言葉の数々はどれも現実感が伴わない。僕の人生の濃度はとても薄くて、透かせば向こう側まで見渡せるはずで、きっとこの歌詞の意味さえ半分も理解できていないだろうと思う。そんなコップ一杯の水にミルクを一滴垂らしたようにうすく濁った僕は、たとえまったく訳の分からない異国の詞であってもなんの抵抗もなく聞くことができた。はたして音楽とはなんなのだろうかと思ったりもするけれど、そんな時は大抵、音楽を聞いていない時だ。僕はただ、メロディに乗せられて眠気が運ばれてこないことを願うだけだった。

乗り換え駅に着いた時、僕の意識はほとんどどこかへ連行されていた。幸運にも曲間の無音中にアナウンスが流れたことで、僕の意識は急浮上した。

乗り込んでくる人波に逆行して電車を降り、都会独特の人ごみに酔いそうになるのをこらえた。これだけ人がいるというのに、知り合いにまったく合わないことに僕は若干の疑問を抱えたまま、階段を探す。つぎは、行き先を確認して乗らねばならない。目的の方面へ続く階段を見つけた僕は、抱えた疑問をホームに捨てていた。

電光掲示板とその隣の時計を見て、目的の電車が来るまで二十分待たなければいけないことを知った。しかし事前に時刻表と照らし合わせたとしてもあまり意味はなかっただろう。それだけ、本数が少ないのだ。

ホームの固く無機質な、およそ長時間座ることを考慮された造りでない椅子に腰かけて、ヘッドフォンを首にかけた。途端に風の吹き抜ける音とどこかで停車する電車の金属音、そしてエキストラのように没個性的な音の数々が耳に入り込む。

ひとつ大きく欠伸をして、首を回す。緊張した筋肉が弛緩していくような感覚に、目を細めた。

ストレートタイプの携帯をバッグから取り出して、誤作動を防ぐホールドを解除する。新着通知はなく、いつもの調子でいつか撮ったコバルトブルーに架かる虹を映していた。

ぼんやりと画面の中の空を眺めていると、電池マークの残量が一つ減った。充電器を持ってくるのを忘れていたことを思い出して、ネットに繋ぐことをやめて、手早くアプリケーションで実家の天気を調べるだけにした。暇を持て余し、僕はホームとホームの間から覗く本物の空を仰いだ。太陽が見え、雲はあまり見えなかった。快晴の基準を思い出そうとしてやめた。雨が降らなければ、それでいい。昨日まで続いていた雨を忘れていたのか、傘さえも持ってきていなかった。

ヘッドフォンを首にかけたまま、コードを指でもてあそぶ。巻きつきた人差し指がほんの少し紫色にうっ血し、痺れを伴う。その拘束から解放すると、たちまちに血液が流れ込み、本来の色を取り戻す。痺れは暖かさに変換された。

ポケットからプレイヤーを取り出して、再生画面を表示させる。見慣れたCDジャケットが一瞬、僕がどこにいるのかを忘れさせた。聞きなれたメロディがあるだけで、僕の心はいつだって穏やかでいられた。